

筑波実験林の中型哺乳類



発行：筑波大学山岳科学センター
筑波実験林
作成日：2021年12月2日

〒305-8577茨城県つくば市天王台
1-1-1
TEL：029-853-2555/2544
FAX：029-853-6612

<https://msc.tsukuba.ac.jp/field-facility/fld-04/>

確認されている中型哺乳類

筑波大学筑波キャンパスにある山岳科学センター筑波実験林は、植物見本園(2.2ha)と圃場(3.4ha)からなる。見本園内には兵太郎池がある。2021年10月時点では、中型哺乳類は、タヌキ、ハクビシン、アライグマ、ニホンイタチ、ニホンアナグマ、ニホンノウサギ、ノネコが確認されている。このうち、タヌキ、ニホンイタチ、ニホンアナグマ、ニホンノウサギの4種が在来種で、タヌキを除く3種は日本固有種である。外来種は、ハクビシン、アライグマ、ノネコであり、アライグマは特定外来生物に指定されている。

掲載した記録について

筑波実験林では、どんな哺乳類が生息しているかを調べるため、2020年1月より自動撮影カメラ調査を行っている。本パンフレットでは、2020年1月から2021年10月までの記録を掲載した。カメラは、フンや足跡など動物の痕跡がみられたときに不定期に設置した。また、2021年3月からは、タヌキの「ためふん場」と、管理棟わきの2ヶ所で定点調査を行っている。この他、職員が撮影した中型哺乳類やその痕跡の写真を掲載した(2020年1月以前の写真も含む)。

参考文献

種ごとの解説については、Ohdachi et al.(2015)等を参考にした。つくば市の哺乳類についての文献には、岩澤ほか(2021)や神宮ほか(2019)などがある。
Ohdachi et al. (2015) The wild mammals of Japan. Second edition. Shokadoh Book Sellers.
岩澤遥, 斎藤昌幸, 佐伯いく代 (2021) 都市化が筑波山周辺域の中・大型哺乳類に与える影響. 保全生態学研究.
神宮翔真, 佐方啓介, 伊藤太一 (2019) 都市域の哺乳類の生息状況把握に向けた自治体の収集したロードキル記録の特徴. ランドスケープ研究, 82(5):725-728.

このパンフレットに関連した動画の掲載サイト。
自己学修のための各種コンテンツ https://msc.tsukuba.ac.jp/msc_worksheets/
筑波大学山岳科学センター YouTube
<https://www.youtube.com/channel/UCAOagbjgkPEqZpBBiH8sEIA/featured>

タヌキ 食肉目（ネコ目）イヌ科

Nyctereutes procyonoides

在来種



2021年3月に、「ためフン場」で2頭が、何度も同じタイミングでフンをする場所が確認された（2021/3/9）。
「ためフン場」は家族で共有されることが知られている。

体重 平均 4 kg
頭胴長 平均 57 cm
尾長 平均 18 cm
分布 東アジアから日本

基本的に夜行性。雑食で、果実や昆虫などを食べる。交尾は2～4月、出産は4～6月くらい。産子数は通常4～6頭。タヌキの社会の単位は、基本的に繁殖ペア。ペアは行動圏を共有し、一緒に行動する。



管理棟の脇で確認されたタヌキ。明るい時間に活動することもある（2021/6/27）。

筑波実験林での観察

自動撮影カメラ調査では、タヌキは1年中確認された。2021年3月に兵太郎池そばの木の下で「ためフン場」が見つかった。「ためフン場」は、ほとんどの場合、1度に1～2頭が利用していた。2021年8月、9月には幼獣も確認された。この他、植物見本園では、落ちているヤマボウシの実を食べにきたところや、水辺にきたところも確認されている。



2021年9月に、「ためフン場」で確認されたタヌキの幼獣（2021/9/24）。



2021年10月に、「ためフン場」で確認されたギンナン入りのフン（2021/10/5）。
ギンナンは、タヌキの秋の重要なエサの一つである。



圃場で確認されたタヌキ（2020/5/28）。

ハクビシン

Paguma larvata

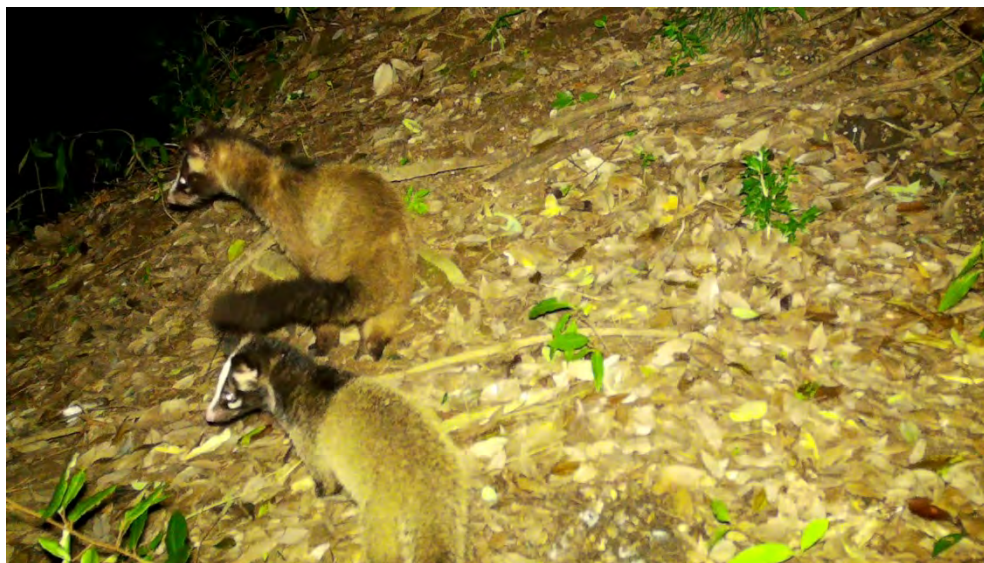
食肉目(ネコ目) ジャコウネコ科

外来種



管理棟そばで確認されたハクビシン(2020/11/26)。額から鼻にかけて白い線があるのが特徴。漢字で書くと白鼻芯。尾が長い。

体重 平均3 kg
 頭胴長 平均52cm
 尾長 40cmくらい
 分布 パキスタン～中国、東南アジア
 基本的に夜行性。樹上性。雑食で、主に果実、昆虫等を食べる。
 出産は3～11月(神奈川県・東京都)、1年中(静岡県)という報告がある。
 タヌキやアライグマと比べて出産時期が長い。
 産子数は1～4頭。



タヌキの「ためふん場」で確認されたハクビシンの親子(2021/9/11)。「ためふん場」で確認された個体は、たいてい通りすぎるだけだったが、フンののにおいをかいでいるときもあった。

筑波実験林での観察

自動撮影カメラ調査では、ハクビシンはほぼ1年中確認された。2021年1月、9月、10月に、親子が確認された。また、2021年7～9月に乳頭が発達したメスが撮影されている。

見本園内のムクノキの樹上で、2020年1月に「ためふん」が見つかった(下の写真)。自動撮影カメラを設置したところ、ハクビシンがこの木に登っているところが撮影された。この「ためふん」からは、翌年芽生えが確認された。見本園内で、他の木の上にもフンや芽生えがあるのが確認されている。

本種は木に登るのが得意で、カキノキに登ってカキを食べているところも目撃されている(右の写真2020/12/24)。また、2020年1月にエノキの木の下で地面で食べているところが撮影された。エノキの実がたくさん落ちていたことから、この実を食べていたと思われる。



(左上) ムクノキに登るハクビシン(2020/2/6)。(右上)ムクノキの樹上(木のまた)でみつかったハクビシンの「ためふん」(2020/1/20)。フンにケンボナシの種子が含まれていた。(右中)芽生え(未同定)を確認(2021/4/13)。(右下)その後(2021/7/16)。

アライグマ

Procyon lotor

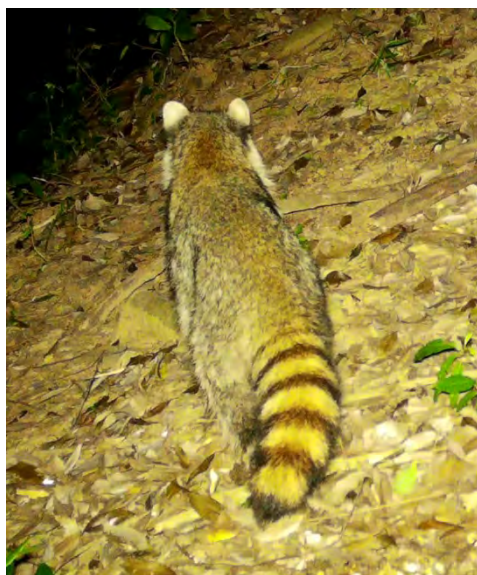
食肉目(ネコ目) アライグマ科

外来種(特定外来生物)



タヌキの「ためふん場」で確認されたアライグマ
(2021/10/15)。「ためふん場」では通りすぎるが多い。

体重 4～9 kg
 頭胴長 40～60cm 尾長 20～40cm
 分布 北米、中米、南米北部
 基本的に夜行性。雑食で、昆虫、両生類、爬虫類、甲殻類、果実、農作物などを食べる。一般的にメスよりオスが大きい。
 交尾は1～3月、出産は3～5月くらい。産子数は平均2～6頭。



タヌキの「ためふん場」で確認されたアライグマ(2021/9/28)。アライグマの尾はしましま模様。



管理棟わきで確認されたアライグマの幼獣(2021/9/14)。このときの映像で親子が確認された。

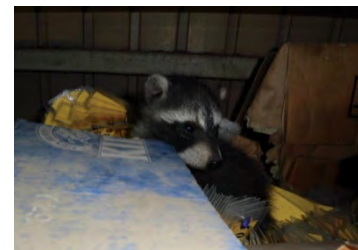
筑波実験林での観察

実験林では、2020年5月8日に兵太郎池のそばで、自動撮影カメラ調査により初めて確認された。5月12～15日に倉庫内で繁殖していたのが確認されたが(下の写真)、その後いなくなった。2021年には実験林で繁殖は確認されなかったものの、9月にアライグマの親子が管理棟そばで撮影されている(左下の写真)。タヌキやハクビシンと比べて、自動撮影カメラ調査での撮影頻度は低い。

(特定外来生物) 主に明治時代以降に持ち込まれた外来生物の中で、農林水産業、人の生命・身体、生態系へ被害を及ぼすもの、又は及ぼすおそれがあるものの中から、外来生物法に基づき指定された生物である。飼育、栽培、保管及び運搬することや輸入することの原則禁止などの規制がある。

茨城県では、アライグマは1990年代から確認され始め、2007年以降捕獲数・目撃数ともに増加傾向である。現在は県南～県北まで分布し、個体数も増加している。つくば市では2020年度に確認地点が急激に増加した。茨城県では茨城県アライグマ防除実施計画に基づいたアライグマの捕獲を実施している。実験林においても、2020年5月から本種の捕獲を実施している。(茨城県アライグマ防除実施方針

https://www.pref.ibaraki.jp/seikatsukankyo/kansei/chojyu_hogo/araiguma_plan.html)



倉庫内のダンボール箱の中で確認されたアライグマの幼獣(2020/5/12)。



倉庫内で確認されたアライグマ(2020/5/16)。5/13～15に、はりの隙間(矢印)で親子が確認された。細いところも上手に歩く。樹上も利用することが知られている。

ニホンイタチ

食肉目(ネコ目) イタチ科

Mustela itatsi

日本固有種



体重 オスは平均450g、メスは平均150g(滋賀県)
 頭胴長 オス平均329mm、メス平均255mm
 分布 本州、四国、九州
 基本的に夜行性。雑食で、ネズミ、鳥、魚、甲殻類、果実などを食べる。

管理棟わきで確認されたニホンイタチ(2021/10/31)。
 時々倉庫の下を出入りしているところが撮影されている。
 兵太郎池の脇で、ザリガニを食べているところが観察されている(2020/4/23)。

ニホンアナグマ

食肉目(ネコ目) イタチ科

Meles anakuma

日本固有種



体重 オスは平均7.7kg、メスは平均5.4kg(東京)。
 頭胴長 オス約65cm、メス約59cm、尾長 14cm。
 分布 本州、四国、九州
 基本的に夜行性。社会単位として母子グループを形成する。オスは単独性。春から夏のエサは、主にミミズ。また、夏はベリーと甲虫を好む。

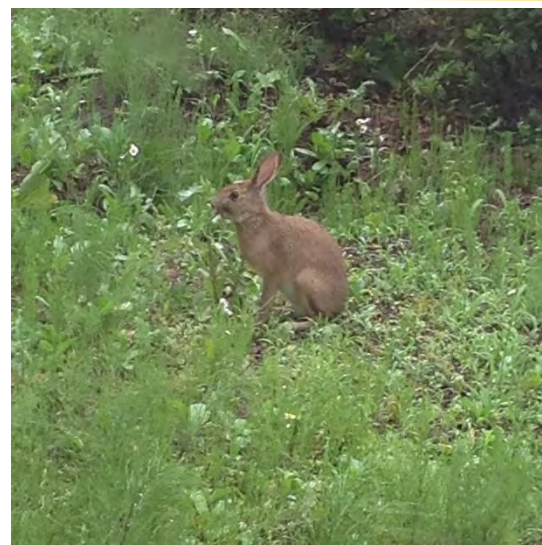
管理棟わきで確認されたニホンアナグマ(2021/8/30)。この期間(2020年1月～2021年10月)に、実験林で確認されたのは、この一度だけである。

ニホンノウサギ

ウサギ目 ウサギ科

Lepus brachyurus

日本固有種



体重 2.1～2.6kg
 頭胴長 45～54cm
 分布 本州、四国、九州
 基本的に夜行性。単独性。植物食。イネ科植物や広葉草本など様々な植物を食べる。軟糞を食べる習性がある。食物不足のとき硬糞も食べる。

管理棟のすぐそばの圃場で確認されたニホンノウサギ(2014/6/9)。草を食べていた。
 最近(2020年1月～2021年10月)、姿もフンも確認されていない。

ノネコ

食肉目(ネコ目) ネコ科

Felis catus

外来種



ノネコは、ペットであるイエネコが野生化したもの。
 ノネコは、国際自然保護連合(IUCN)による世界の侵略的外来種ワースト100にあげられている。日本では、特に島嶼生態系への影響(希少種の捕食など)が問題となっている。

管理棟わきで確認されたノネコ(2021/9/14)。
 複数のノネコが実験林を利用していた。